

ミナミキイロアザミウマによる施設マーコット幼果の被害について

大久保宣雄 (長崎県果樹試験場)

Nobuo OHKUBO : Damage on Young Fruits of Murcot, a Variety of Tangor, in the Greenhouse by *Thrips palmi* Karny

果菜類等の重要害虫であるミナミキイロアザミウマは広食性で、寄主植物は34科117種に及んでいるが¹⁾、カンキツ類への寄生、加害は知られていない。今回初めて本種による施設栽培マーコットの幼果及び新しょうの被害を確認したので、その概要を報告する。

1. 被害の発生状況

1988年6月4日に大村市弥勒寺町の施設栽培マーコット(4~5年生、一部高接、約8a)に多数のミナミキイロアザミウマの成虫及び幼虫の寄生を認め、本種による被害を確認した。同時に下草のイヌビユや取り残しのインゲンの芽及び新葉にも本種の発生を認めた。

本園は幼木が中心で、樹間空間の有効利用に間作していたインゲンでミナミキイロアザミウマが増殖し、5月20日頃の抜き取りで行き場を失ってマーコットに集中加害したものと推測したが、果実の被害症状や幼虫の生息状況からみて、5月以前のインゲン栽培中から加害されていた可能性も考えられる。

果実の被害の症状は、果梗部のケロイド状のリング斑とそれから溝に沿って果頂部に伸びた帯状の傷で、いずれも灰色であった(写真1)。新しょうの先端の伸長が止まり、葉は縮れて変形し、ひどい場合は褐変して落葉した。展開した葉裏には灰色~灰褐色の帯状や斑点状の傷が残った。

9月7日における果実被害は、園を大きく東西に二分すると、東側の区画がひどく、被害果率約90%、被害度約34であった。これに対して西側の区画の被害は軽かった(第1図)。これは発生源であったインゲンの栽培が東側区画の中央附近に限られていたためと考えられる。6月5日の発見直後の被害も9月とほぼ同様の状況であった。

2. ミナミキイロアザミウマの発生状況

洗浄法によると6月5日の成、幼虫密度は約13頭/果、約32頭/新しょうと高く、被害状況からみてそれ以前も高密度であったと推測される。その後6月14日までは果実及び新しょう上の生息虫数は多かったが、6月7日と6月14日の2回、シベルメトリン乳剤1,000倍を散布した結果、6月下旬以降の発生は少なくなった。8月下旬以降になると新しょうで再発生がみられ、新たな被害も発生した(第1表)。

平板型黄色粘着トラップ(15cm×20cm)への成虫の捕獲消長も洗浄法と同様の傾向を示した(第2表)。このため新しょうの発生が続くとマーコットだけで周年発生が可能と考えられる。

このようにミナミキイロアザミウマはカンキツ類でも増殖可能で、条件さえ整えば、果実及び新しょうを加害することから、今後マーコット以外の施設カンキツの被害が懸念される。

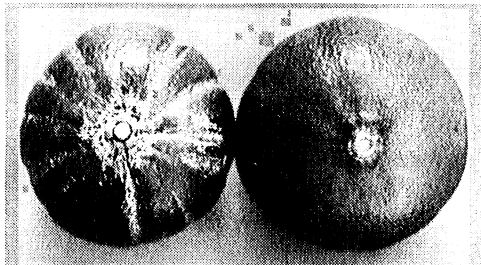


写真1 ミナミキイロアザミウマによるマーコット幼果の被害(9月7日)

左:被害果, 右:健全果

樹数:	121
被害果率:	89.8
被害度:	34.4
樹数:	27
被害果率:	60.3
被害度:	15.7

被害度 = $\frac{(\text{軽度} \times 1 + \text{中度} \times 3 + \text{甚大} \times 6)}{\text{全調査果数} \times 6} \times 100$

第1図 マーコット園におけるミナミキイロアザミウマの被害(9月7日調査)

第1表 マーコットの果実及び新しょうのミナミキイロアザミウマの発生消長

調査月日	密度(ノ果)		密度(ノ新しょう)	
	成虫	幼虫	成虫	幼虫
6. 5	11.8	1.4	19.2	13.2
6. 14	3.1	0.6	5.7	8.3
6. 24	0.9	0.7	0.8	2.8
7. 4	0	0	0.1	0.1
7. 19	0	0	0.2	0.1
7. 29	0	0	0	0.4
9. 7	0.03	0.8	4.7	8.6

第2表 マーコット園におけるアザミウマ類の発生消長(黄色粘着トラップによる)

調査月日	種名		
	ミナミキイロ	チャノキイロ	ハナアザミ
6. 1~6. 5	378	1	12
6. 14	478	0	9
6. 24	39	2	48
7. 4	10	3	103
7. 19	2	74	152
7. 29	0	30	30
8. 11	10	31	29
8. 23~9. 8	24	52	9

引用文献

1) 宮崎昌久・工藤 巖: 農環研資料 3, 1~246, 1988.